

先端が乳肉に触れた途端、博人の喉から熱い喘ぎがあふれる。

真夏も乳房に伝わる男子高校生の体熱に炙<sup>あぶ</sup>られて、よがり声をもらした。

「あはああ」

真夏が使った『食べる』という言葉にふさわしく、剥き身の亀頭が胸の深い谷間に呑みこまれて消えた。

「ふああっ！ す、すごっ……」

途中で言葉が消えた。快感の圧力で、敏感な亀頭を押し包まれる。真夏が前へ出ると、先端から根元まで隙間なく乳肉の壁に密着してきた。

（こんなに気持ちいいことが、この世にあるなんて、信じられない！）

プールの対岸で受けた手と口の愛撫のほうが、緩急のリズムがつけられ、テクニクは上なのかもしれない。しかし乳肉の圧倒的な感触は、技術などはるかに超越している。ペニスを挟まれているだけなのに、まるで全身を乳柔肉に包みこまれている妄想に浸ってしまう。

博人はたまらず自分から腰を動かしはじめた。じっとしているには、あまりにも心地よい。裸の尻たぶがこわばり、もっと乳房の谷間を味わいつくそうと、下腹部を真夏の胸に押しつけた。乳房が押しつぶされて、腹や太腿にも濡れた柔肉と密着する快

感がひろがった。

少年の反応を待ち受けている真夏も、両手で自分の胸を動かしはじめる。

「ああつ、いい。胸いっぱい、博人くんのオチン×ンを感じる！」

自身の豊乳を揉みたてる動きが、内側に挿入されたペニスを巧みに締めつけ、しゃぶる動きとなった。

「はあつ、真夏さんの胸が、どんどんすごくなる。あうつ、たまらない！」

新たに加えられた乳責めに翻弄ほんろうされて、博人の腰の動きがさらに激しくなる。初体験に舞いあがった男子高校生の動きは、ただ自分の快樂だけを追求する乱暴で稚拙なものだ。

「ああ、いいつ。もっと、強く、オチン×ンを動かして。あつん、胸の奥まで、貫いて」

性に慣れた大人の男からは感じられない一途さが、真夏には悦びを増大させる最高のエネルギーとなった。博人に語った言葉は、けっして博人を煽あおるための嘘でも、媚態でもない。はじめて女の身体に触れる少年を挟みつけていると思うと、乳房のなかで淫らな業火が燃え盛る。コーチに淫乱のしと罵られたときから自覚した、自分のなかに巣くう妖しい魔物が暴れている。



真夏も我慢できずに、胸を揉みつづけながら、乱れた声を少年へかけた。少年と自分自身をもっと燃やすために。

「あああつ、博人くん、わたしの胸は気持ちいい？」

夢中で腰を振りたてる博人が、全身からプールの水を垂らして声高に叫んだ。

「は、はいっ！ 最高に気持ちいいですうっ！」

「博人くんが気持ちいいと、わたしも気持ちいい！ 博人くんのオチン×ンを入れられて、胸がきゅんきゅんうれし泣きしてる！ ほら、見て。乳首が爆発しそうに勃っちゃってる」

真夏に指摘されて、博人も気づいた。胸に貼りつくウォーターブルーの皮膚に、高々と屹立した突起がある。全身を侵す悦楽に、羞恥心も忘れて叫んだ。

「勃ってる！ 真夏さんの乳首、ものすごく勃ってます！」

「つまんで。昨日の夜みたい。オチン×ンでわたしの胸を貫きながら、指で乳首をしごいて」

「はいっ！」

真夏の指の動きに乗ってくねくねと動く二つの乳首を、博人は両手の指先でつまんだ。脳を沸騰ふつとうさせる興奮のために力の加減ができず、乳首を強烈にひねってしまう。

「うあっ！ うっんうんん」

乳首に加えられた痛みも、少年を呑んだ胸は猛々<sup>ただけ</sup>しい乳悦に変換した。柔軟に形を変えつづける豊美乳のなかで、快楽の熱波が荒れ狂う。膝立ちになった下半身がひとりでに前後左右にうねり、ハイレグの奥で肉唇がはしたなくひくついている。少年を射精させる前に、真夏が軽くイッてしまいそうだ。

だが、やはり初心者の高校生のほうが先に限界が来た。博人は押し寄せる射精感を、そのまま口に出した。

「あううっ、出る！ 真夏さん、出ます！」

「来て。わたしの胸にいっぱい吞ませて！」

喜色に輝く真夏の巨乳のなかで、ペニス全体が痙攣<sup>けいれん</sup>した。これまでの射精とは次元の違う快感に襲われて、博人は腰がくだけそうになり、思わず乳首をつまむ指に力をこめた。真夏の乳筒をひねりあげながら、全身を爆発させる。

「うっあああああっ!!」

温かい粘液のほとばしりを、真夏は巨乳全体で感じた。少年が発するエネルギーが、自分の胸のなかに沁<sup>し</sup>み入ってくる。

「ああっん、博人くんの精液をもらって、胸も乳首も最高に気持ちいい!!」